

アマ落語 乙なもの

落語ブームに乗ってアマチュア落語家による高座が各地で人気となつている。教員、医者、牧師といった本業のかたわら磨いた話芸には、プロの噺家とはまた違った笑いの味わいがあるようだ。(右田和孝)

「(寺の名前と同じく)時計屋山今何寺(時計屋さん今何時)……太郎山しよう寺(太郎さん東海林)ってのもあります」

福岡県宗像市の宗像ユリックスで毎月第2日曜に催されている百円寄席。地元の宗像落語会会長である粗忽家酔書さん(50)(本名・桶川律暢)が、丸眼鏡で歌手東海林太郎のものがまねなどを交えながら、だじゃれを

連発すると、満員に近い客席はそのたび笑いと拍手にわいた。

演目は「山号寺号」。寺の名称をめぐるたいこ持ちと若旦那なのやりとりが面白い古典落語だ。

酔書さんは東海大付属第五高校の国語教諭。落語会は、福岡教育大落語研究会のOBらで1991年に結成、2007年から会員が出演する百円寄席を始めた。会員は17人で、この日はほかに、会社員の粗忽家勘

タンさん(48)(同・末吉哲)、精神科医の寿亭町さん(53)(同・西松央一)らが口演、会場をわかせた。入場料は100円と格安で、いつも170席が完売してしまう人気。だが、酔書さんは「プロには芸道

を極めるという厳しさがあるが、僕らアマは面白けりゃいいだけだから、気楽なものです」と謙虚だ。

しかし、同館の担当者は、そんな気楽な雰囲気や、敷居の低さがその人気の秘密とみる。

帰省するたびに、実家の母親と聞きに来るといふ常連客、短大准教授鈴岡昌宏さん(53)(大阪市)は言った。「落語の完成度が案外高く、素人ながらも頑張っている姿がよく伝わってくる。それが温かく、楽しい、いいムードを生んでいる」

大分県佐伯市の「県南落語組合」も根強い人気を誇る。84年結成で、

先生や牧師さん 話芸磨き各地で高座



東海林太郎のものがまねを交えて熱演する粗忽家酔書さん(福岡県宗像市の宗像ユリックスで)



九州で多数活躍

九州にはほかにも活躍中のアマ落語家が多い。

宮崎県日向市には、柱大黒さん(34)(本名・甲斐伸也)が党首を務める4人グループ「どしろろう党」。地元の日向サンパーク温泉「お舟出の湯」で毎月寄席を開いている。

熊本市では、ふだんは市文化財課職員として遺跡発掘調査を行っている、舟山亭究蔵さん(49)(同・美濃口雅朗)。長崎県諫早市には、牧師のかたわら、小学校、教会などで断を披露している変わり種、濱の家真砂さん(51)(同・石川博詞)がいる。

会員は16人。会長の泥谷亥生さん(76)と、手品専門の副会長足田勝也さん(76)のコンビは、各地で年間約100公演をこなす。

16日、老人会に招かれた大分市・巨野原公民館で、泥谷さんは間男騒動を描く十八番紙入れを口演した。

年増のおかみの妙な流し目のそぶり、会場からドツと笑いが起きた。

泥谷さんは元小学校長。落語の心得はなかったが、85年に入会、退職後に本格的に取り組んだ。99年にはがんで舌の一部を切除したが、執念で3か月後には高座に復帰した。

その経験から、高座では「笑いは健康のもと。くよくよしちゃいけない」と語りかけ、そしてこんなふう

に笑わせる。「大きな口をいっぱい

に開けていつも笑っていれば、元氣

になるよ。ただ近所の人は、どう言

うかわかんけど……」